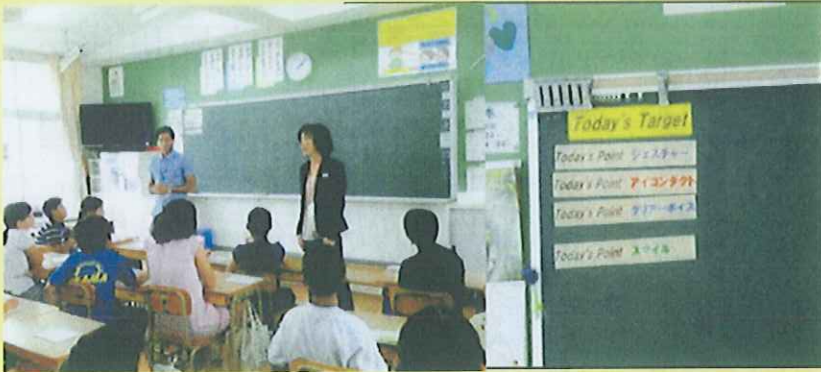


「福岡教育大学との連携による研究プロジェクト」＜2外語活動＞の報告  
 モデル校(赤間小学校の2回目の授業から 9/17 )  
 ＜目的＞外国語活動における書き言葉の体験を促すタスク活動の企画検討実施



始めからHRTの出田先生が真ん中に立ち授業を進めています。学力向上支援教員の竹原先生もALTとの会話の模範を示します。黒板にはToday's Targetがシンプルな言葉で掲示されています。  
 ①ジェスチャー②アイコンタクト③クリアボイス④スマイルの4つは実際のコミュニケーションにおいて必須アイテムといえることです。

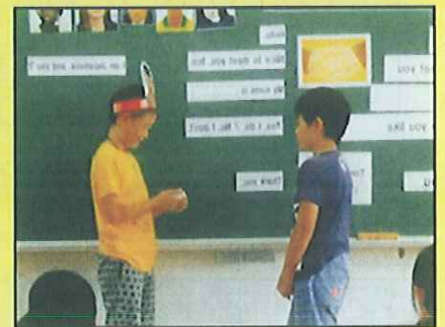
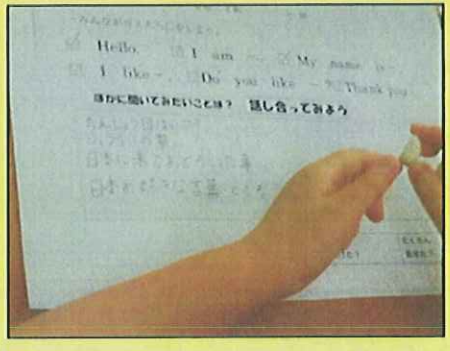


前回の授業から改善していること

- ①授業の流れに外国語を学ぶ必然性を入れて1つの単元をつくるようにしたこと。
- ②実際のコミュニケーションで使用する言語を活用するようにしたこと。
- ③書くタスク活動：文字を書く活動を入れたこと。



初めて会う外国の方にはどんな挨拶をしたらいいのかな？  
 先生達の模範演技を見ながら考えます。  
 外国の著名人の、お面をつけて外国人になりきり挑戦し練習します。



学校に外国の方が来たら何を伝えようか？どのように挨拶をしたり伝えたりしたらいいのだろう？班で考えました。好きなことは何、日本に来てどれくらい、どんな食べ物が好き、どんなスポーツが好きなど、いろいろ考えてみました。そのあと練習しました。



## 授業後の事後研 教育大学の先生からの指導助言(9/24)

### (1) 授業者から

- テキストのハイフレンズの流れと違う単元展開となっているが児童にはスーと入っていた。  
外国の方と話したい→外国の方が来る→どのようにコミュニケーションをとったらいいのだろう・・・という必然性のある流れにしている。児童のテンションはとても高い。
- 学級担任がする外国語活動だからこそ異文化教育であり、人権教育でもあると捉えて授業をするようにしている。
- 英語の文字を書くことを入れた。児童ははとても書きたがる傾向がある。

### (2) 授業を参観した城山中校区の先生から

- 小学校5年生とは思えない程子ども達の力がついていました。
- 内容がたくさんだった。中1でも2時間かけてやっている内容だった。
- 中学校の教師としては文字は正しく書かせたいという思いがあるので間違っただまでもいいということには違和感を感じた。
- 赤間西小としては赤間小が、とても進んでいるので心配になった。

### (3) 福岡教育大学の先生方から

- 授業が前回とは全く違ってきていた。いい方向に変わっている。子ども達が必然性のある流れの中で外国語を学ぶ授業に変容していた。
- 児童の英文字を書きたいという気持ちがとても高まったところにネームカード(名刺)づくりを入れたのは効果的であった。
- 英文字を児童が初めて書くので、間違っただまでもそれを正しく書かせることに力を入れる必要はないのではないだろうか。すなわち間違っていていい。子どもは間違わないと伸びないという意識でいい。
- 子どもの作成したネームプレートがとてもよかった。
- ALTの先生よりHRTが真ん中で前に出ている。授業全体がよくなっていた。特に進め方がよかった。英会話スクール的な授業ではなく外国語活動の授業時間になっていた。
- 書くタスク活動になりつつあった。

### タスク活動の定義

- (1)リアルなコミュニケーションの状況の中でリアルな言語を使用しながら従事する活動
- (2)学習者が従事する活動は形式中心でなく意味中心であること
- (3)タスクのゴールに向けて足場を作りながら学習者の達成を支援していく形で活動が進むこと